

区 分	持続性の高い農業生産方式の内容	施用の目安等
有機質資材 施用技術	<p>○たい肥等有機質資材施用技術 土壌診断に基づき、適切に完熟たい肥等を施用する。</p>	2 t/10a
化学肥料 低減技術	<p>○肥効調節型肥料施用技術 被覆肥料等（春肥）の利用により肥効率を向上させる。</p> <p>○有機質肥料施用技術 有機質肥料（秋肥、春肥）を用いた施肥体系とする。</p>	化学合成窒素量 25kg/10a 以内
化学農薬 低減技術	<p>○機械除草技術 除草機械により雑草（園地周辺での害虫発生助長植物も含む）を駆除する。</p> <p>○生物農薬利用技術 生物由来の有効成分である農薬の利用により病害虫を駆除する。 ・生物農薬：B T剤（チャノコカクモンハキ、チャハマキ、ヨモギエダシヤク）など</p> <p>○抵抗性品種栽培利用技術 耐病性品種利用により病気等の発生を抑制する。</p> <p>○光利用技術 光反射資材利用により害虫を忌避させる。</p> <p>○フェロモン剤利用技術 フェロモン剤の利用により害虫の大量誘殺や交信を攪乱させる。 ・トートリルア剤（チャノコカクモンハキ、チャハマキ）など</p> <p>○マルチ栽培技術 稲わら等利用により有害動植物のまん延を防止する。</p>	化学合成農薬成分回数 5成分以内
<p>その他の留意事項 有機質資材施用で肥料効果が期待できる時は減肥する。 たい肥は、秋期の深耕により土壌混和を図る。</p>		